寺崎央

癌一髪！

悦楽的闘癌記

的記髮!

寺﨑央

癌一髪！

悦楽的闘癌記

二〇一二年三月一五日　第一刷発行

著　者　寺﨑 央

発行者　石﨑 孟

発行所　株式会社マガジンハウス
〒一〇四-八〇〇三
東京都中央区銀座三-一三-一〇
電　話：〇四九-二七五-一八一一（受注センター）
〇三-三五四五-七〇三〇（書籍編集部）

印刷・製本　中央精版印刷株式会社

©2012 Hisashi Terasaki, Printed in Japan
ISBN978-4-8387-2411-6 C0093

乱丁本・落丁本は購入書店明記のうえ、小社製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。定価はカバーと帯に表示してあります。
本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）は禁じられています（但し、著作権法上での例外は除く）。
断りなくスキャンやデジタル化することは著作権法違反に問われる可能性があります。

マガジンハウスのホームページ http://magazineworld.jp/

癌一髮！

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

目次

肝癌の宣告　009
妙な夏風邪　013
町医者の息子　017
長寿総合病院　021
テレビ局を志す　032
老人雑文屋　036

最後の治療法 041
スピードの狐先生 044
入院 048
TAE（肝動脈塞栓術） 056
治療同意書 060
T字帯 064

立派な被曝者？ 070
ミリプラ 075
六時間の金縛り 078
リナック 088
患者模様 093
病院案内 109

二ヶ月と五日後、友のメール　115
癌の死滅と腫瘍マーカー　131
退院後二ヶ月の現況　137
日進月歩の癌治療　146
あとがき　152

版画　畑中純

装丁　木庭貴信
角倉織音（オクターヴ）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

肝癌の宣告

「肝臓というのは右に右葉、左にやや細めの左葉と繋がっているんですが、ここが右葉になります。ＣＴは身体の上から見たように撮ってるので画像では右葉は左になりますけど、この右葉に大きくあるこのシコリ、このうっすら大きなシコリが腫瘍なんです。その周りに癌細胞が点々と付着しているのではないかと思うんです。

それを確かめるために先日の血液検査をさらに詳細に調べましたら、腫瘍マーカーが一万二六〇〇という数値を示していました。平常値の上限が八〇と

いうものですからこれは異常に高い。悪性としか言いようがないわけです」

二十一インチの液晶画面に映し出された肝臓の、ソフトボール大に薄い影を作るCT画像を次々と変化させながら、紹介された内科医酒盛先生は癌とは言わずシコリという言葉を繰り返した。

一瞬世の中がグラリと湾曲し診察室が伸びたり縮んだりして〈浅草はなやしき〉の凸凹鏡のようになった。

「つまりこのあたり一帯は癌細胞であると」

と花咲比呂志は冷静な大人らしく平静を装って画像を指して訊いたはずなんだが、発声法に狂いが生じたのか、普段の三倍の大声が診察室に響いた。しかし本人には部屋の遙か彼方から苦しげに囁いてるようにしか聞こえないんだからはた迷惑な話である。

というわけで、ソフトボール大の悪性腫瘍を見せられ、いわば、肝臓癌のステージⅣの宣告を受けたのが二〇一一年七月二十六日のことであった。長寿総

合病院の玄関を出ると照りつける日差しに花咲比呂志も人並みにめまいを覚えた。

「ムルソー…、太陽のせい…」

と呟いてケータイをパカッ。

「賽の目が悪い方に転がったぜ」

「あっら〜……」

と言ったきり賽の目ならぬ花咲の細君の音声は途絶えて返ってこない。

「ま、ジタバタしても始まらねえしな。癌がなくなる訳じゃなし。ま、長生き出来ねえってことは確かなこった」

「あんた何言うの。途中でフラフラしてちゃダメよ。妙なこと考えちゃダメよ。ちゃんと、タクシーで帰ってきなさいよ。まっすぐ。電車はやめてタクシーだよ」

一九五〇年代の日本映画みたいなシチュエーションになっちゃうんだから古

い。田中絹代が鼻をフガフガいわせながら電話にぶら下がってる図が目に浮かぶ。花咲比呂志の足は帰りがけとは言え、なぜだか上野アメ横に向かっていた。

普段なら興味津々で眺める家電量販店のタブレットPCもスマートフォンも、あるいは乾き物屋のカシューナッツのデカ袋も、すべてが自分とは無縁のものにしか見えず、双眼鏡を接眼レンズからではなく逆から眺めたように、遠くで小さくコキコキしている風景を見るともなく見ていた。

花咲は大きくため息を吐いてから電車で帰った。

妙な夏風邪

強烈な腹痛に襲われた、食い物が腹に入らない、立って歩けないから日常は這って行動していた、逆に逆立ちすると何キロも歩けた。

などという何らかの兆候があれば早めに何とかなったものを、癌細胞が肝臓を浸食してるというのに何の自覚症状も現さないところが肝癌の嫌らしくも憎らしいところである。

五月の下旬、花咲比呂志は三八度六分という高熱に見舞われた。日曜日のことゆえかかりつけの桃歌仙クリニックは休診日、で日曜診療に指定されてる病

院を探し飛び込んだが、インフルエンザのテストは陰性、通常の風邪と診断された。

熱冷ましの頓服と胃薬を日に三回飲んだが、床から起き出すのに一週間かかった。

花咲の解熱法は決まっている。

町医者であった父親直伝の技で、頓服を飲む、寝間着を着込む、分厚い（夏でも）布団にくるまる、氷枕をする、くるまった布団から絶対に出ない、やがて汗が滝のように吹き出してくる、湯気も立ち上る、全身ズブズブの状態でもうこれ以上我慢出来ないというところまで蒸し風呂状態で引き延ばしたら、次にガバッと起きて素っ裸となり汗を拭き取り、再び乾燥した下着、寝間着に着替え同じ行為を三度繰り返す。

これで見事、熱は平熱に下がる。

はずなのだったが、今回のは違った。冷めた熱がまた上がるのであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c